そこはどこ ―指示について―

藤本 真理子

一 はじめに

現代日本語の指示詞コソアのうち、「そこ」という語形には次のような例が見られる。

(1) 医者：(患者の腹部を押さえながら) どこが痛みますか。ここですか。
患者：そこは、それほどでもありません。
【聞き手領域の指示】

(2) お客：そこの角を左へ曲がって。
タクシーの運転手：そこの角ですね。
【中距離の指示】

この「そこ」に代表されるように、指示詞ソが今、目の前で知覚・感覚できる対象を指し示す場合、話し手や聞き手といった人称による区分と、近い遠いといった距離による区分の二つの方法から成る。ただし(2)のような距離による区分の例も、聞き手がいなければソは用いにくい((3))。

(3) (独り言で) わあ、{?そこ／あそこ} の店にかわいい服が並んでるなあ。[1]

聞き手のいない独り言のような場面では、アが選ばれることになる。すなわち(1)(2)ともに聞き手の存在がソを用いる動機づけになっていると言える。また、現在のところ(2)のような中距離の指示は、「そこ」「そのへん」のような場所を指す例に多く、「それ」や「その」などの形式にはあまり見られないことが報告され

ている。

このように、現代語では指示詞ソと聞き手との結びつきは強いもののように見える。しかし、古典語では、ソが聞き手の領域を表すと言える確かな例は上代、中古にはほとんどなく、聞き手領域を指示するソを一定数見出すことができるのは中世に入ってからのことである。ただし中古においても、「そこ」という形式に関しては、聞き手自体を表す（4）のような二人称代名詞の例が、ある程度の数をもって確認できる。

（4）〔源氏→夕霧〕「そこにこそは、門はひろげたまはめ」

【あなたこそは、この家門を広げてください。】

（源氏物語、幻、四：五四一）

本稿では、指示詞ソの中でも意味変化の先駆け的な役割を担う「そこ」という場所指示の語形に着目し、「そこ」の指し示す対象や意味用法がどのように変化してきたのか、上代、中古の例を中心に考察する。また場所指示が指示詞の用法変化の中で先駆け的に働く要因についても検討する。二節で指示詞の用法について確認した上、三節では現代語の「そこ」の用法、四節では古典語の「そこ」について考察し、意味変化の要因を考察する。五節はまとめである。

二　指示詞の用法

二・一　分類の基準と定義

指示詞による指示という行為は、ある対象を認識し、対象との距離が計算され、発話されるという過程を持っている。そのため、指示詞の用法を検討する際、基準となるのは指示対象の所在、すなわち談話において、ある対象がどのような要素から導かれてきたかという点である。談話における文脈の構成要素としては、田窪（一九八九：一一九二）において、次の要素が提示されている。

（5）a　発話の現場：〔話し手、聞き手、現場の事物、発話そのもの、発話のとき、発話の場所〕

b　共有知識：〔発話時に話し手が想定している聞き手の知識〕

c　発話によって構成されたテキスト

指示対象の所在に上の要素があることを踏まえ、指示詞の用法を大きく三つに分け、次のように定義する。

【1】現場指示：発話の現場に存在し、今、知覚・感覚できる対象を直接指し示す用法。

例）「これを上げましょうか」私は鳥打帽を脱いで栄吉の頭にかぶせてやった。

（伊豆の踊子、三八頁）

（1）（2）の聞き手領域の指示や中距離の指示の例はこれに含まれる。

【2】観念指示：先行文脈にも現場にも見られない対象を指し示す用法。

例）が、見合いの日から五日目の朝であったが、偶然病室が二人だけになった機会を捉えて、「雪子ちゃん、―どうやねん、あの人？」と、気を引いてみた。

（細雪（上）、二四一頁）

【3】文脈指示：先行する言語テキスト内にある対象、もしくは対象を導き出すような文脈を指し示す用法。

例）「あきづけば、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」と説明もなく、女はすらりと節もつけずに歌だけ述べた。何の為か知らぬ。「その歌はね、茶店で聞きましたよ」

（草枕、五六頁）

二・二　直示と非直示の関係

二・一節では、指示対象の所在に対応させて、三つの用法に分類したが、対象が言語外世界にあるかないかという点に注目するならば、【1】の現場指示に代表される〈直示〉の用法と【3】の文脈指示に代表される〈非直示〉の用法というように二つに分けることもできる。直示と非直示の関係は、次のような例からも確認できる。

（6）意識がもどってきた。しかし、いまどこにいるのか、すぐにはわからなかった。なにも見えなかった。おれの目がなにかでおおわれているからだった。／ここはどこなのだろう。そう考えはじめようとしたが、だめだった。

（星新一「回復」一〇三頁）

（6）の例では話し手が存在する現場の場所を指し示す「ここ」が用いられる。その後、「そう考えはじめようとした」と続く。「考えはじめようとした」のもまた話し手の行為であるにもかかわらず、コではなくソが用いられる。これは、「考えはじめようとした」内容（指示対象）が言語外世界に存在しないためにソが選択されたと見ることができる。

また、（6）で「ここ」と表された場所を「そこ」に置き換えることはできない。

（7）?そこはどこなのだろう。

（7）の発話が可能なのは、たとえば誰かに電話をかけながら、その電話の相手のいる場所を推測する場合などである。これらから、コは直示、ソは非直示を担うと言える。またアに関しては、直示において、遠近の対立によって、コと使い分けられていることが確認でき、下の表のような関係に整理される。

上代、中古では、【2】の観念指示のような用法において、ソが用いられる例も確認できる（（8））。

	直示	非直示
指示詞	コ（近） ア（¬近）	ソ

（8）a　かくばかり恋ひむものそと知らませばその夜はゆたに［其夜者由多尓］あらましものを【こんなにも恋しくなると知っていたら、{?その／あの}夜はもっとゆったり過ごしたものを】

（萬葉集、巻第一二、二八六七）

b　御遊びのついでに、［帝→尚侍の君］「その人のなきこそいとさうざうしけれ。」【{*その／あの}人（光源氏）のいないのがじつに物足りないなあ。】

（源氏物語、須磨、二：一九七）

二・三　コ形の場所指示

コソアの系列だけでなく、指示詞では「―コ」や「―レ」など後接要素も意味決定に関与する。二・二節（6）の「ここ」は、同じく指示詞コを用いたとしても、（9）のように「これ」の形に言い換えることはできない。

（9）?これはどこなのだろう。

現代日本語では、場所を表すとき、「ここ・そこ・あそこ」といった、―コ形を用いて指示を行うのが一般的なためである。

三　現代語の「そこ」

三・一　「そこ」の解釈

本節では、「そこ」の文脈指示の例が何を指し示すのかについて検討を加える。まず、「そこ」の指示が単純な場所を指すと見えるのは、（10）のような例である。

（10）太郎は昨日、［大阪］へ行った。次郎もそこへ行った。

（10）では「そこ」が「大阪」を指しているように捉えられる。しかし、次の（11）の「そこ」は「故郷の大阪」を指していると見てよいであろうか。

（11）　太郎は昨日、［故郷の［大阪］］へ行った。次郎もそこへ行った。

次郎にとって「大阪」は故郷でなくても、（11）の文は成り立つ。「そこ」の指示対象は「故郷の大阪」とは解釈できず、「（太郎の）故郷の大阪」と解釈される。これは、固有名詞から名詞の種類を変えた（12）のような例でも同様に言える。（12）の「そこ」は「次郎の嫁の実家」解釈とはならない。もしこのような意の文にするなら、行先となる場所のみを指示詞にするのではなく、（13）のように変える必要がある。

（12）　太郎は昨日、嫁の実家へ行った。次郎もそこへ行った。

（13）　太郎は昨日、嫁の実家へ行った。次郎もそうした。

不定名詞の場合も指示対象が透明・不透明の違いこそあれ、（10）～（12）と同様であり、（14）の「そこ」は「太郎が昨日、行ったどこか」という前文全体から導き出された情報を表すと言える。また（15）のように、多少の距離があっても解釈可能である。

（14）　太郎は昨日、どこかへ行った。次郎もそこへ行ったらしい。

（15）　太郎は昨日、どこかへ行った。どこへ行ったか私は知らず、仕事に出かけた。だが、次郎は｛そこ／*ここ｝へ行ったらしい。

このように、文中の語句レベルの対応関係ではなく、言語的文脈によって形成される情報を指し示すことについては、Yoshimoto（一九八六）などでも指摘されている(2)。

（16）　小麦粉と牛乳をよく混ぜ、そこに卵も入れてさらに混ぜる。

つまり（16）の「そこ」であれば、指示する対象は「小麦粉と牛乳を混ぜた混合物」と言うべきものと考えられる。

三・二　「そこ」の指示対象

ここまで見てきたように、「そこ」の指示対象は直接的なものとは言えず、明示的であるとも言えない。たとえば、次のような例がある。

(17)　A：どちらにお出かけですか。
　　B：ええ、ちょっとそこまで。

ここでは、話し手にとって出かける先は明確であるにも関わらず、あえて直示の「ここ」や「あそこ」という表現を用いて説明していない。「そこ」を用いることで、聞き手に明確に伝えたくはないという話し手の意図を示すことになる。ただし「そこ」に曖昧な指示が可能かというと、「そこ」という語形そのままでは難しく、(18)のように用いられる。

(18)　最近のアイドルは［*そこ／そこら（へん）／そのへん］にいる女の子とかわらない。

四　古代語の「そこ」

四・一　上代

上代、コとソは〈可視的〉〈不可視的〉という対立のもとで使い分けがなされていたと考えられ、ソには次のような観念指示の例も見られる。

(19)　かくばかり恋ひむものそと知らませばその夜はゆたに［其夜者由多尓］あらましものを【こんなにも恋しくなると知っていたら、あの夜はもっとゆったり過ごしたものを。】
　　（万葉集、巻第一二、二八六七、(8 a) 再掲）

「そこ」も文脈から導き出された場所を表すというよりも、文脈を切りとったという情報を提示するような働きを持つ。

(20)　冬ごもり　春さり来れば　鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山をしみ入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の木の葉を見ては　黄葉をば　取りてそしのふ　青きをば　置きてそ嘆く　そこし恨めし［曾許之恨之］　秋山そ我は
【(冬ごもり)春が訪れて来ると、今まで鳴かなかった鳥も来て鳴きます、咲かなかった花も咲いていますが、山が茂っているので入って取りもせず、草が深いので手に取ってもみません。秋山の木の葉を見ては、赤く色づいたのは手に取って賞でま

す、まだ青いのはそのままにして嘆きます。そのことが何とも残念です。秋山こそ良いと思います、私は。】

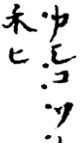
（万葉集、巻第一、一六）

(21)　秋の田の穂田の刈りばかかよりあはばそこもか人の［彼所毛加人之］我を言なさむ

【秋の田の稲穂の刈り取り場であなたと寄り合ったならば、そのようなことでも他人は私のことをとやかく言うでしょうか。】

（万葉集、巻第四、五一二）

上代、指示詞アの前身とされるカの指示はほとんど見当たらない。次の『新撰字鏡』からもわかるように、(21)の「彼所」のような例も「そこ」と読まれた可能性が否定できない。



(20)(21)のように文脈指示として機能することが多く、場所を指す例には次の(22)～(24)のようなものがある。

(22)　山の峡そことも見えず［曾許登母見延受］一昨日も昨日も今日も雪の降れれば【山の谷あいもそこだとも（どこか）分からない。一昨日も昨日も今日も雪が降っているので。】

（万葉集、巻第一七、三九二四）

(23)　わが岡の龗に言ひて降らしめし雪の推けしそこに散りけむ［彼所尓塵家武］【私のいる大原の岡の、水の神に命じて降らせた雪のくだけた細片が、そこ（私から近いとは言えない場所）に散ったのでしょう。】

（万葉集、巻第二、一〇四）

(24)　天離る鄙にしあれば　そこここも［彼所此間毛］同じ心そ　家離り　年の経ゆけば　うつせみは　物思ひ繁し　そこ故に［曾許由恵尓］心なぐさに　ほととぎす【田舎なので、そちらもこちらも同じ気持ちでしょう。家を離れて何年も過ぎてゆくので、人はみな物思いが多いものです。それゆえ御心を慰めるために、ほととぎすの】

（万葉集、巻第一九、四一八九）

このように、上代では場所を指すように見える例も(22)のような現実には対応する場所がない例や、(23)(24)のように対比的な意味から出てくるものに偏る。

また次の（25）の例などは、文脈の指示から「その時点」「その理由」などという解釈にもつながる。

（25）（略）ますら我すら　世の中の　常しなければ
うちなびき　床に臥い伏し　痛けくの　日に異に
増せば　悲しけく　ここに思ひ出［許己尓思出］
いらなけく　そこに思ひ出［曾許尓念出］　嘆く
そら（略）【ますらお の私さえ、世の中は定めない
もの、倒れて床に臥して痛みが日ごとに募るので、
悲しいことをこれで思い出し、つらいことをそれ
（その時点／その理由）で思い出し、嘆く心が安
らかでなく】

（万葉集、巻第一七、三九六九）

四・二　中古

中古に入ると、指示詞カの例も見られるようになり、「ここ」「そこ」「かしこ」という語形が出そろう。「ここ」の意味は歴史的に見て、現代語と大きく変わらない使用が上代から確認される。「そこ」は会話文中において、次のような聞き手自体を指す二人称代名詞としての使用がまとまって見られるようになる。

（26）a　うちわたす遠方人にもの申すわれ　そのそこに白く咲けるは何の花ぞも【はるかに見渡す遠くのお方にちょっとお尋ね申したい。そこのところに白く咲いているのは、何の花なのですか。】

（古今和歌集、巻一九、一〇〇七、読み人しらず）

b　〔源氏→夕霧〕「そこにこそは、門はひろげたまはめ」【あなたこそは、この家門を広げてください。】

（源氏物語、幻、四：五四一、（4）再掲）

「かしこ」については、話し手に近くない場所、またはその場所にいる人物を表すことが確認できる。

（27）a　少将、帯刀に語らひ給。「くちおしう、かしこにはえ行くまじかめり。この雨よ。」とのたまへば（略）【残念なことに、姫君のところに行くことはできないだろう。】

（落窪物語、第一、四二頁）

b　〔左大臣〕「北の方はうれしと思ひたりや。かげずみなどは思ひ知りためり。」などのたまへば、女君〔→左大臣〕、「かしこにもうれしとのたまふ時多かめり」とのたまふ。【北の方もうれしいとおっしゃる時が多いようです】

（落窪物語、第四、二六八頁）

「かれ」や「あれ」という語形に、(28)のように、一見、聞き手を指すような例が見られる中、「かしこ」に関しては、聞き手自体を表す例は見当たらず、―コ形においては指示詞ソによる「そこ」が優先的に聞き手との結びつきを強める状態にある。

(28)　俊蔭、林のもとに立てり。三人の人、問ひていはく、「かれは、何ぞの人ぞ」。俊蔭答ふ、「日本国の王の使、清原の俊蔭なり。(略)」といふときに(略)【あなたはどういうお方か】

（うつほ物語、俊蔭、一：二二）

四・三　中世以降

中世にも、先に見た二人称代名詞の意をもつ「そこ」の例が多く確認できる。(29a)は聞き手の占める場所を指し、(29b)は聞き手自身を指す例である。

(29)a　一人当千の兵ども、われもわれもと馬の頭をたてならべて、大将軍の矢おもてにふさがりければ、力および給はず、〔教経〕「矢おもての雑人原、そこのき候へ」とて【矢の正面の雑兵ども、そこをのきなさい】

（平家物語、巻第十一、嗣信最期、二：三五三）

b　〔僧正→上人〕「そこは貴き上人にておはす。」【あなたは貴い上人でいらっしゃる】

（宇治拾遺物語　下、一四二、巻一二ノ六、二九七頁）

しかし、テキストによっては指示詞ソの用法に偏りも見られ、(29)のような例が全く見られない資料もある。たとえばキリシタン資料の一つである『天草版平家物語』では、五一例中、五一例が先行文脈中で示された場所を表す次のような用いられ方をする。

(30)a　その分にして平家わ重能とゆう者を頼うで四国の地え渡られたが、そこで重能が才覚をもって四国の国うちを催いて、讃岐の屋島にかたのごとくな板屋に内裏や、御所を作らせえた。

（天草版平家物語、二〇四：一六）

b　木曾わ三百余騎で、竪様横様蜘蛛手十文字に駆け破って、六千余騎があなたえざっと駆け出られたれば、百騎ばかりになられた土肥の次郎が一千余騎で支えた：そこを駆けやぶって出られたれば、五十騎ばかりになられた。さうさうして通らるるほどに、ついにわ主従五騎になられた。

（天草版平家物語、二四五：五）

また講義録や談義本などに目を向けると、具体的な場所の指示ではなく、次のような文脈の内容を指す例がほとんどを占める。

(31) a　ヤツハリ我身ヲ好ト思フ身贔屓ナ根性ガ腹一杯アルニ由テ。他ガワルヒト云ト腹ヲタテル。ソコヲカヽル罪業ニノミ朝夕マトヒヌルト仰セラレタ。

（御文浚溝録、中七オ）

b　サスガハ無常ヲ知ヌテモナク…。先（ツ）目ノ前ノコトニ取（リ）紛レテ。ツヰ一寸ノガレニイツゾハ〳〵ト思（フ）テヰルウチニ。一生ハヅラ〳〵ト立テシマフ。ソコヲイタヅラニ明カシ暮ラスト仰セラレタ。

（御文浚溝録、下一オ）

c　何レモガ此タヒコノ人間ニ生レタハ。後生助カル為ニ人間ト生レタ。ソコヲ思ハス浮世事ニ取紛レ。

（御文浚溝録、下一オ）

(31) の例は、「そのこと」のように、前文脈までの内容をまとめる際、用いられている。これは講義のような、教え説く場での独特な言い回しとも考えられる。

四・四　文脈指示から場所の指示へ

以上、見てきたように本来、文脈（文脈から導き出される情報を含む）を切り取って提示するという働きのあった「そこ」は、「ここ」や「かしこ」など他の―コ形との意味関係の上で用法が変化していく。―レ形は人や物事を表す一方、―コ形はよりいっそう場所を表すものとして働くようになる。これについては橋本（一九六六）でも次のような指摘がある。

(32) ソコは無限の領域の一角を区切って指示するもので、対象の多くは閉鎖的なまとまりを持つ先行文の内容全体である。空間的指示では区切りの基準として聞手への配慮があり、その結果場所指示においてまず中称的なソが現れた。

（橋本一九六六：三三八）

上代、現場指示としての用法を持たなかった「そこ」は、中古、中世には聞き手領域を指示するようになる。これは、話し手からの近遠の情報を持たないもの、たとえば「聞き手の近くの～」といった情報を、新たに指し示したいとなったとき、それまで現場指示としては用いられていなかった「そこ」が使いやすかったということが考えられる。また切り取って情報を提示す

るということは、そもそも説明のためであり、説明するには説明する相手が必要となる。これも聞き手とつながる要因の一つと言えよう。

さらに、何かに依存した指示を行うという点から見ると、推論から得られる情報は、上代は文脈から導き出されたものを中心に指示を行い、時間、場所、人に関わらず指すことができていた。一方、現代語では、一部の接続詞的使用はあるものの、他は場所が中心であり、文脈から導き出されるどこかの場所という意を持つことが多い。どちらも文脈を指すことに変わりはないが、文脈から場所というように重点の置き様に変化が生じたと見られる。

五　まとめ

本稿では、指示詞ソの中でも、場所指示の「そこ」という語形が、上代、中古、中世を通して、文脈を切り取って提示するという働きから、話の場にいる聞き手という存在に依存した指示をも行うようになる様相を捉えた。

また同じ「そこ」という語形でも、資料ごとに現れる用法に偏りが見られ、先行文脈から導き出せる場所を指示する例が多数ある『天草版平家物語』のような資料もあれば、先行文脈の内容そのものを受ける文脈指示としての働きが多く確認できる講義録などの資料があることが確認できた。

今後は、この資料性に加え、「そこ」という―コ形について、「そこここ」など複合語において見られる意味役割の検討や、―コ形に対して―レ形など他の後部要素を伴う語形との比較が課題となる。それらを踏まえ、〈非直示〉の用法を中心に、ソ系列がどのように意味変化をするのか検討していきたい。

注

（1）本稿の用例に付す主な記号は、次のとおりである。

・〔　〕：話し手・聞き手。話し手→聞き手の順で示す。

・【　】：現代語訳（逐語訳ではなく意訳）。

・＊：この印をつけた文が非文法的であることを表す。

・？：この印をつけた文が文法的に不自然であることを表す。

（2）言語的文脈によって形成される情報について、Yoshimoto（一九八六）は次のように述べている。

（i）小麦粉と牛乳をよく混ぜ、それをフライパンに注ぐ。

上記（＝右記※筆者注）の「それ」が指し示す値は、前文に現われた名詞句「小麦粉」「牛乳」のいずれでもな

く、「小麦粉と牛乳を混ぜた混合物」とでも言うべき対象である。これは言語的には現れないが、フレーム的知識と推論によって状況に導入されたものであるYoshimoto (1986)。

（金水一九九九：七二）

調査文献

『うつほ物語』『源氏物語』（以上、新編日本古典文学全集、小学館）、『萬葉集』『落窪物語』『宇治拾遺物語』（以上、新日本古典文学大系、岩波書店）、『平家物語』（日本古典文学大系、岩波書店）、『新撰字鏡』（臨川書店）、『天草版平家物語』（明治書院）、『御文浚溝録』（高羽五郎（復刻））

『おみそれ社会　だれかさんの悪夢』星新一の作品集XI（星新一、新潮社）

参考文献

金水敏（一九九九）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』六-四、六七-九一頁、自然言語処理学会

金水敏・岡崎友子・曹美庚（二〇〇二）「指示詞の歴史的・対照言語学的研究―日本語・韓国語・トルコ語」生越直樹編『シリーズ言語科学4　対照言語学』二一七-二四七頁、東京大学出版会

金水敏・田窪行則（一九九二）『指示詞』日本語研究資料集【第一期第七巻】、ひつじ書房

田窪行則（一九九〇）「〈特集・談話研究の新展開〉談話管理の理論―対話における聞き手の知識領域の役割―」『言語』一九-四、五二-五八頁、大修館書店

橋本四郎（一九六六）「古代語の指示体系―上代を中心に―」『国語国文』第三五-六、遠藤嘉基博士還暦記念国語學特輯号第二、三二九-三四一頁、京都大学文学部国語学研究室国文学会（『橋本四郎論文集　国語学編』（一九八六）角川書店、二〇九-二二七頁に再録）

橋本四郎（一九八二）「指示語の史的展開」『講座日本語学2文法史』二一七-二四〇頁、明治書院（『橋本四郎論文集　国語学編』（一九八六）角川書店、二二八-二五〇頁に再録）

本稿は、第六回おのみち文学三昧第一部尾道市立大学日本文学会大会（二〇一四年一二月六日（土）、於：しまなみ交流館大ホール）における口頭発表にもとづく。

本研究は、平成二七年度JSPS科学研究費26884041（研究活動スタート支援『日本語指示詞の運用を中心とした歴史的変化に関する研究』）の助成を受けたものである。

―ふじもと・まりこ　日本文学科講師―